

「幼少児教育が国の再生の道」 1998 年

わが国が内面から瓦解の淵目あることは疑いない。経済や物質ではなく、教育だけがわが国の救済の礎である。わが民族が、集団同調的で幼稚感情のままに留まり自分に責任を負う自立した成熟した人格でないことが、いたるところで露見している。次代の社会の中心となる幼少年を望ましき成熟人格に育てる教育にわが国の未来がかかっている。わたしは医師であるが、ささやかながら診察室の内外・大学の内外からの公的私的経験を踏まえて公教育に提言をしたい。一見、荒唐無稽に見えるかもしれないが、十分に成果があったことである。

1 “悪しき”子育ての結果である、大量の“無気力、なげやり、人任せ、落ち着きなさ、だらしなさ、わがまま、などなど”の子供たちの教育をどうするか？

1 - 1 小学生までは幼年返りをさせる。

この子たちは、何事も思い切りしたことがなく感情さへも浅いままで豊かに育まれていない。満足の心地も知らず、悔しさの爆発もない。自由にさせられたと言っても、幼い状況の中に囲われたまま、その中で放任されただけである。動物園と同じ事。しつめたと言っても、それは調教したに過ぎない。遊び事、稽古事の多くも調教に過ぎない。家中や幼稚園でどれほど調教していることか。ナイフに触るな、木登りは危ない、かけっこ競争はやめろと。皆一斉に列に並ばされ時間通りに事を運ばされた。今は歌を歌え、もう砂遊びの時間は終わったと。絵を描き続けたい子もいればブランコを始めたい子もいるだろうに。そして、よく調教された者にご褒美があったのだ。

徳育とか思いやりとか知識偏重とかの題目はどうでもよい。力やモラルは人格の中で培われるのであって、掛け声はかえてこのプロセスを阻害する。自分の実経験なしにはコトバのロボットになるだけである。すべての出発は自分の体験から生まれる感情である。取り掛かる気概、学ぶ昂奮、落ち着いた心、豊かな想像力などへ発展を遂げる土台は、幼少年期に育まれた深く多様な感情である。その感情が貧困であればいっさいは貧困のままにしか終わりようがない。

家庭で望ましくあるべきであった幼年子育てを公教育として幼年返りクラスで公然とおこなう（そうではない今は教員が不登校や抑鬱や胃潰瘍で受診してくる）。不登校児学級があるが、目標は普通学級に単に戻ることにようだ。そうではなく、幼年返りクラスでは強く深い感情経験をするを目標とする。学科として敢えて言うなら体育・美術・音楽・家庭科に集中し（だけでよい）、そして何より出来合いでない遊びを重んじる。深い感情は人まねやお仕着せなぞりからは生まれない。とにかく自分がむき出しになってやってみるよう誘導する。狭い部屋に閉じこめて放り出すのでは

ない。広場、公園、川、山、海や、工作道具材料、書画の道具、楽器の中で一人にしておく。傍で見ている。あるいは促して難しそうなことを一緒に行う。この子たちは、はじめは怖がって取り掛れないか、一人になるとぼんやりとして時を過ごす。国語・算数・理科などの正規学科を使って感情を育てる（分からなくて悔しい・出来て嬉しい・失敗して恥ずかしいなど）には未だ早い。

できなかったことができるようになり、難しそうなことにも取り掛れるようになったなら、通常学級へ転身させる。

1－2 中学生では実人生体験をさせる。

中学生では学校外に幼年返りの機会を設けないと無理である。男子は体力があり女子では性的身体成熟がある。ここでは半年から2年間、集中して実人生の体験をさせる。体験の質が問題なので、よく言われるボランティアなどは好ましいとは思われない。現在の自分に安居したまま自分自身を向上させる困難に挑みもせず、安易に他人にしてあげて優越した気分になるような情緒的な体験類は避ける。この子たちに必要な経験は、自分のエネルギーを傾けて、その益害が他人にではなく直接自分に及ぶ種類の無言の体験である。「解説」や「・・・べき」などは弊害あって不要。むき出しの無言の現実こそ良き教育の環境である。このコースを終えたのち学科の程度に応じて通常学級に転身させる。15才の中1がいっても不都合はない。

1－3 高校生以後では後戻り不可能。

高校以後の年齢では、後戻りはできない。集中力、持続力を欠き、抽象思考が苦手というよりできない、怠惰で受け身の人間であるとして処遇する手だてを考える。これは2の貧弱な「大学生」の教育にも通じる。

2 この(1－3)延長線上にある、不出来な遊ランド「大学生」をどうするか？

“中学の分数が出来ない”「大学生」は教えられなかったから出来ないのだ、と誤診せず、不運にも工夫し考えるエネルギーが培われず自分にたいする不安の感情も希薄なままに育ってしまったのだ、と正しく診断して治療を考える。かれらは新しい困難と知ればたちまち心がすくむ。多くの場合、本来の大学教育へ飛躍する力をもはや持ち得ない。指示された固定作業の方が心は安定する。そういう彼らに見合う方向と進路、つまりは単一の技術、ないしは技能の訓練を準備する。抽象思考の高等教育や、エネルギーを投入しなければ獲得できない高等技術を叱咤して課しては、かれらは潰えてしまう。現に「大学」を中退、卒業？して専門学校に転身する者が後をたたない。これは正しい選択と思われる。脳だけでは感覚も運動もないお化けの豆腐で、末梢神経・骨・筋肉・感覚装置まで整っていないければ人間ではないのと同様に、社会は高等教育の抽象思考だけでなく単純技能も必要とする。カリキュラムはその技能習得を目標とする。悲惨な

現実には、1例を挙げれば、反復暗記作業の末に国家試験をパスしたこの種の者も医師になってしまっていることである。たとえ名手でも機銃手は技能の手だれであって、抽象思考を要する作戦指揮には不向きである。かれらにとっても社会にとっても不運はなはだしい。技能者も日々工夫しそのジャンルを進展させる事が期待されるが、今日のこの層には期待しがたい。次項3の公教育を受けた中から育つ技能者まで待たねばならないと思われる。

大学が今後二分化するという予測があるが、二分化しなければならない。一方のものは大学ではないのだ。それを大学と呼称するから、全部ない交ぜになって治療は混乱する。腫瘍でも良性と悪性では治療の思想が違い、したがってプランが違う。区別すべきことは区別しなければならない。

3 わが国ではもはや自ずからなる“良き”子育てを期待はできないから、“良き”子育てを国として具体的にどうするか？

公教育最初の1年を前記の幼児返りクラスとする。既存の学科は全く課さない。調教を徹底して排して、学童本人の遊びの工夫と冒険を促し貴び、感情の深化を助長する。生活に存分の満足があれば規律と忍耐は自然に生まれてくる。満足は規律と忍耐なくば得られないことを体得する（たとえば朝寝坊しててはいいいことはない）。このクラスの教員には必ずしも今日の教員資格がなくてもよく、違った資質が要る。他人の子育てをするのだから人間のレベルと構造を良く知る冷静で持続力のある実践的人物で、のぞましくは本人の子育てが無事終わった人物でなければならず、感情過多、頑張り屋、研究会会議おしゃべり好き人間は避ける。子は親と教員の間で分裂しはじめるから、他人による子育ては実は同時に親も引き連れた子育てになる。親子ともどもは何倍も困難、というより不可能で、親を調教するしかない。子供だけならまだ簡単である。単に小人数クラスだからよいわけではない。じつに、親子二人がもっとも小人数クラスである。クラスの内容が肝腎で、この事をはっきりとわきまえた教員をクラスに充てる。この種の先生には年齢は問題とならない。身体的知的に興奮出来る時間と機会を与えてくれる人ならば、子供は張り切ってついてくる。引退した様々な人の中からも然るべき人物をこの1年の先生として依頼してもよい。地域集団子育ては、スローガンを掲げて集団調教をするに等しいから断じて避ける。そのうえ、子の調教に勇んで出てくるタイプは、一般にこのような人格にならないようにという格好のサンプルつまり、小うるさい目立ちたがり、杓子定規のいばり型、などのタイプであることが多い。幼少年期教育の本質は知識技能の習得ではなく力の養成であるから、教師と子供の一对一の人間的環境の中で成立するものである。没個性的集団調教は悪夢である。

こうした10年ほどの先によろしく専従技能教育も大学教育を本来のものに立ち返り得る基盤ができあがると思われる。こういった幼少年教育を経た教員はもちろん、親

も今度は良き子育てをできるようになって、わが国の人間風土が良循環へ変換されると期待する。

今日是对症療法ばかりが横溢しているように思われる。学科の削減、飛び級、空虚なスローガンなど。解熱剤や咳止めばかり投与しても結核菌を殺滅せねば病気は治らない。原因治療を放棄しているあいだに本体はどんどん蝕まれているようで強く焦慮する。